

森氏計画に影響力

ラグビーW杯開催に縛られ

新国立競技場の建設で、文部科学省や事業主体の日本スポーツ振興センター(JSC)が見直しに否定的だった理由の一つが「二〇一九年ラグビー・ワールドカップ(W杯) 日本大会に間に合わない」ことだった。その背景には、日本ラグビー協会会長を先月まで十年務め、二〇年東京五輪・パリンピック組織委員会会長でもある森喜朗元首相の存在がある。

(新国立競技場取材班)

首相官邸を訪れた森喜朗元首相
=17日、東京・永田町で



十七日、安倍晋三首相との会談を控えた森氏は、民放のテレビ番組に出演し「あのデザインは嫌だった」と見直しを容認。問題

の責任者を問われ「文部科学大臣ですね」と語った。安倍首相の見直し表明後、同日夜にもテレビ番組で「(デザインに)違和感を感じた」などと語った。新競技場でのラグビーW杯開催にこだわりを見せ計画の中心的立場にいた森氏が、折れた瞬間だった。

に尽力したW杯だった。一年二月には超党派の「ラグビーW杯日本大会成功議員連盟」が八万人収容規模への改修を決議、国が調査費を計上した。森氏は東京五輪招致にも深く関わり、失敗した一六六大会の招致でも、日本体育協会会長として招致委員会の役員を務めた。二〇年五輪に都が手を挙げたのは、議連の決議から五カ月後の一一年七月。ある政府関係者は「新国立建設の表向きの理由はラグビーW杯がきっかけだったが、二〇年五輪の立候補表明の時期とも重なる」と指摘する。

今月七日、新競技場の計画を検討する有識者会議では、一千五百二十億円の計画を「国のプロジェクトで、さまざまな意見があつて圧縮されてきたが、妥当だと思つ」と真つ先に容認した。

金をかけるな、と言うのだから仕方ない

森喜朗会長は17日、東京都内で報道陣に対応し、新国立競技場の建設計画白紙撤回について「誰にも責任はない。金をかけるなと言うのだから仕方ない」と話した。内容は以下の通り。

一新国立競技場が白紙に戻された。

「アスリートたちがしっかりプレーできればいい。(競技場の)形にこだわっていない。今までの計画をゼロにするなら、それはそれで結構ですと言うしかない」

一文科省やJSCに見通しの甘さ

は。

「無理なんですよ。スーパーゼネコンと話し合うような大きな工事をしたことがない。だからそういう計算ができなかったと思う」

一迷走が続いた。誰に責任があるのか。

「誰にも責任はない。金をかけるな、と言うのだから仕方ない。国がたった2500億円も出せなかったという不満はある。組織委員会が五輪にかかるお金はそんなもんじゃない。みんな高いと言うけど、何を基準に言うのか」

森喜朗氏 一問一答

市民団体

規模や景観未解決・国民受け狙う下心

若者

作家の森まゆみさんらが共同代表を務める市民団体「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会」は、建築家横文彦さんらと連携

し、二年近く計画見直しを求めてきた。共同代表の一人で建築家の大橋智子さんは十七日、「声を受け止めてもっと早く軌道修正を図

れば、スムーズに計画変更もできた。旧国立競技場の解体前なら、改修で済ます選択肢もあったはずだ」と決断の遅れを批判した。

今後の見直しについて「コストやデザインの問題だけが注目されているが、五輪史上最大規模のサイズや、景観への悪影響の問題

は手付かずのまま。そこまですり込み込まなければ、評価はできない」とくぎを刺し、「きちんと市民の声を反映できる仕組みを作してほしい」と求めた。

一方、国会前で安保関連法案に抗議する若者は計画の白紙撤回に疑いの目を向ける。東京都国立市、大学四年の佐藤鞠さん(三三)は「安保関連法案の衆院通過後というタイミングで計画変更を表明した。国民が喜ぶだろうという下心を感じてしまつ」と話した。